しんぶん赤旗 2024.4.7

（第３種郵便物認可）

権力監視はどこへ メディアと政治を考える＋30

藤沢忠明　著

報道への不信の原因解きほぐす

「メディアと政治」のありようを批判的に吟味し、その問題性（書名にある、メディアの「権力監視はどこへ」）に迫ろうとしたのが本書である。そこでは、赤旗記者としての取材・報道の豊富な経験がいかんなく発揮されていて、叙述は具体的で明快だ。

本の泉社・1518円

ふじさわ・ただあき
52年生まれ。赤旗編集局テレビ・ラジオ部部長

この本は3部で構成されている。Ⅰ部は主に雑誌論考からなり、そこでは、安倍政権のメディア介入、官邸のテレビ監視と菅政権のメディア介入、政党助成金の問題点とメディア、安倍元首相の「国葬」に関わるテレビ報道など時代や時期の重要な論点とテーマに即して、まとまった分析が示されている。なお、「しんぶん赤旗」でテレビ・ラジオ部が、メディアへの批判も含め、どういう仕事をしているのかを紹介した論考も興味深い。

Ⅱ部には、赤旗掲載の「レーダー」欄を中心にしたコラムが50本収められていて、カバーする時期は2017年から2023年に及び、政治とメディアに関する時々のイシュー（論点）や問題が網羅されている。Ⅲ部では、「政治とカネ」などについて書いてきた社会部時代の記事を中心に30本取り上げ、それぞれの記事の趣旨や現代の問題とのかかわりなど丁寧に説明を加えている。

本書はメディアと政治の現在地を、ジャーナリズムを支える権力監視の弱化と喪失（権力によるメディアへの介入とメディアの権力への忖度（そんたく）・癒着）の視点からえぐり出し、その全体状況と問題点を提示している点で貴重な意味をもつ。日々の情報や報道に疑問や不信を抱く市民が少なくない中、そうした疑問・不信の原因と理由を本書は解きほぐしてくれるからである。

ここでの提起も踏まえた上で、政府寄りの報道が増え、政府批判の言論が抑止され、多様な情報が主要メディアによって提供されない事態を克服するためには、市民のためのメディアに変えていく抜本的なメディア改革の課題が求められている。

評者　田島泰彦　元上智大学教授